慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	岡田泰男著『アメリカ経済史』
Sub Title	
Author	高橋, 和夫(Takahashi, Kazuo)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2000
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.93, No.3 (2000. 10) ,p.663(151)- 666(154)
JaLC DOI	10.14991/001.20001001-0151
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20001001-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」93巻3号（2000年10月）

書　評

岡田泰男　著

『アメリカ経済史』

慶應義塾大学出版会，2000年，310頁＋v

「アメリカの世紀」が暮れようとしている。一部で「ニュー・エコノミー」と自画自賛される好調な経済は，アメリカが21世紀の世界経済においてはたすべき役割と影響力の大きさをうかがわせる。グローバル化の大波はアメリカ自身にもはねかえり，その社会・経済構造を揺り動かしつつあるが，グローバル経済の明日を知るためにも，長期的・歴史的な視点から，アメリカ経済の過去の発展を振りかえり，その将来を展望する作業は不可欠である。あふれる断片的な情報や解説をふるいにかけ，一時的なもの・特異なものと，永続的なもの・一般的なものとを，区別することは，他の誰よりも歴史家の仕事である。本書の比喩を用いるなら，絵画から少し離れて観ることで得られるパースペクティヴ，すなわち，バランスのとれた見方こそ，歴史のもつ効用にほかならない。

本書にはグローバル化時代の要請に応えて書かれたアメリカ経済史の最新の概説として類書にはない特色が見られる。第一は，編年的叙述の方法を採らず，論題別の章立てにしたことである。アメリカ（史）の特殊性（つまり他国との違い）を明らかにする目的から，また，現在と過去の間を自在に往復するために，採られた方法である。第二は，特殊性を理解するために，他国との〈比較〉に努めたことである。その際，日本の社会システムや政府主導の経済発展のあり方に対してしばしば向けられる著者の鋭い批判の矛先を，意外と感じる読者も多いのではないだろうか。戦後一時代を画した比較経済史学派の〈近代化論〉を彷彿とさせるが，著者にはアメリカを〈典型〉扱いする意図はなく，あくまでも，その〈特殊性〉を浮き上がらせることが目的である。このような意図から著者が選択したトピックスを示せば次の通りである。

第1章　アメリカ経済の発展
第2章　人口と資源
第3章　南部と北部
第4章　工業化の道
第5章　資本家と大企業
第6章　移民と労働者
第7章　女性の役割
第8章　農民のゆくえ
第9章　都市の成長
第10章　政府と経済
第11章　アメリカと世界

各章の内容に立ち入るまえに，目次からうかがえる本書の第三の特色について指摘しておきたい。アメリカ経済の「主役たち」を扱った諸章で（第5章～第8章），女性にとくに紙幅を割いていることである。戦中・戦後の女性の職場進出の増加という歴史的現象を説明するためであるが，アメリカ史の歴史的個性として「女性の役割」に著者が注目したということである。もちろん，近年の内外の女性史研究や社会史研究の成果を十分フォローしており，著者の目配りの良さを感じさせる。

さて，全体の序論の位置を占める第1章では，マクロ経済指標の趨勢を俯瞰しつつ「植民地から世界の大国へ」の発展を概観し，「経済構造の変化」を浮き彫りにするとともに，長期的な発展を可能ならしめた「制度と文化」に言及する。合衆国憲法と連邦制，ピューリタニズムの遺産，などからなる制度的・文化的枠組みが，自由な企業活動を促す競争的環境を用意したとされる。そして，戦後「政府と民間との融合」が進む中で（とはいえ，混合経済という術語は小見出しにも索引にも現れない），産業構造の変化をリードしたのは，「市場の力」であり，「政府の政策」ではなかった，という本書の基調が示される。

人口，土地・エネルギー資源の長期的な推移を統計にもとづき考察した第2章には，土地開拓との関連で重要な役割をはたした公有地政策に関して，著者ならではの知見が随所に見られる。建国200年を迎えた1976年に公有地法が改正され，かのホームステッド法が廃止される一方，1891年以来禁じられていた公有地の売却処分が復活した，という事実を知る者はそう多くない筈である。「なお，これを『公有地払い下げ』と記す書物が多いが，これは官尊民卑を旨とする日本流の表現で，アメリカ史を理解してない証拠である」，という語気鋭い指摘に出会い，不明を恥じないアメリカ研究者は少ないであろう。

第3章と次章では経済史の中心的テーマを扱う。「貿易と経済発展」では，貿易を成長のエンジンではなく成長の侍女とみなし，国内的諸条件を成長の主要因とする持説が展開される。「綿花と小麦」は，一組の絵の解読を通じ地域自治のあり方，社会的エトスの差を論じるもので，南部と異なり北部では近隣住民の自発的協力なしにコミュニティの生活が立ちゆかなかったことが，説かれる。通念と異なり，西部フロンティアでは孤立した農民の相互扶助が彼らの福祉に寄与した。このことからも，「大きな政府」（第10章）の出現が19世紀の「自由放任」にとってかわる，という図式は単純すぎる。

「ブラジルとの対比」は短い叙述ながら，アメリカ北部と異なり，独立後も一次産品輸出に依存し続けた国民経済の構造的弱さ――南部と共通する――を描いている。最後の「奴隷制の長い影」は，南北戦争を時代区分に用いる編年的叙述が陥りがちな素朴な進歩史観を免れている。著者は，奴隷制廃止後の南部における黒人の社会的・経済的地位の悪化を指摘し，黒人が解放によって「得たものは名のみの自由であった」，と記す。

第4章は，北部を起点とするアメリカにおける自立的な国民経済形成の歩みを描く。北部の農村は，食料・原料供給，工業労働者の供給，工業製品市場，という「農業の役割」をはたし，工業化の前提を用意した。とくに，農村市場の均質的性格が後に自動車などの大量生産品が普及する素地を形成した。「工場制の成立」では，スレイターによる紡績工場建設に始まるアメリカ産業革命の展開を論じ，南北戦争前のニューイングランドで機械産業が繊維産業から分離・独立していた，と指摘する。とはいえ，ロードアイランド型とウォルサム型を資本の系譜の視角から捉えず，保護関税の役割についても従来の研究史ほど重視しない。国内市場の成長に寄与したのはむしろ，合衆国憲法，国内開発，最高裁判決，など，法制度や政府の他の役割であったとする解釈を示す。

アメリカの経済発展は，建国期にハミルトンが唱えた農・工均衡型の成長ではなく，実際には「不均衡な成長」の過程をたどった。特定産業に対する政府の保護は有害であり，市場の力と民間の企業家による創造的破壊こそが産業構造の持続的変化を導いて経済発展を維持する，というのがその含意である。「技術と大量生産」では，フォード・システムの原型を，コルトの兵器工場などの標準部品によるアメリカ的工業生産方式に求める。第4章の最後の節は，大量生産体制とアメリカ的生活様式の成立を論じるうえでふれないわけにはゆかない「自動車の世紀」である。ただし，ヘンリー・フォードの肖像を描くのであれば，次章で取り上げた方がよかったのではないか。

第5章から第8章までは個々の社会集団を扱う。もっとも，第5章の前半は貨幣・金融制度と資本市場の発達を解説し，後半も前世紀末の企業大合同による「大企業の成立」から現代のベンチャー企業の台頭に至る企業組織の変遷を経営史的にたどる。そのため，企業家個人の影はやや薄く，本書の社会史的叙述が精彩を放つのは他の社会集団に関してである。第6章には，イタリア移民の営む「夜の商売」についての記述や，「プロテスタンティズムの倫理」説を鵜呑みにしている読者が目を剝きそうな，「自分で働くのはごめんだ」という「怠惰」も「植民地以来のアメリカの伝統」なのだ，とする，勤労倫理衰退論への反駁，が見

られる。さらに，前工業化時代の伝統に染まった移民の工場労働の実態と経営側の対応を興味深い筆致で描きつつ，末尾で著者は，労働組合を変化に抵抗する「利益集団」であるとし，個人が経済社会の変化に挑戦し，適応していったことがアメリカ国民の伝統であり，「貴重な遺産」である，と結んでいる。

分断的なアメリカ労働市場という特質に女性の就業の歴史から光をあてたのが第7章である。だが，この問題は，家庭対就業，家事労働も仕事も同時に背負う女性の負担，といった性差別の次元だけで完結しない。「性差別の中に，さらに人種差別が存在した」からである。年齢差別や家父長支配の存在も指摘されるべきかもしれない。イタリア移民の「主婦の就業率はきわめて低い」にもかかわらず，娘の有業率が高いのは，家計の必要上「夜の商売」の選択さえも迫られた可能性を示唆するからだ。とはいえ，著者は黒人女性の場合にしても，「出口なし」の絶望的状況とはみない。複雑な背景をもつ問題を統計数字をもとに冷静に俯瞰し，主婦を長い間家庭に閉じこめてきた原因を丹念に考察する。

第8章は，通説に安住することなく，積極的に新しい研究成果を取り入れる著者の柔軟な思考を反映するものである。「農民と市場」と題された一節で，初期ニューイングランド農村＝タウン内で行われた作物や労働の直接の交換について素描し，いわゆる近隣交換が19世紀初頭に至るまで農家需要の4分の3を占めたことを指摘する。社会的分業展開史論とは逆に，商品生産の世界にではなく，「われらが失った世界」に，著者の視線は向けられている。さらに，都市化と開発によって土地を追われ少数派に転落した農民に向かって環境変化への適応を説く代わりに，政府による庇護と農地の保護を示唆する著者のバランス感覚に，いわゆる市場主義者との違いが感じられる。

最後の三つの章は再び〈マクロ〉的に論題を扱う。第9章はわが国の経済史研究における空白を埋める貴重な貢献である。ニューヨーク，シカゴ，ロサンジェルス，といった大都市の形成を，それぞれの工業化の特質と関連づけて論じ，LAの発展の特異性を視覚的にも理解させる（図9-2）。公有地売却や土地収用など公権力が都市建設においてはたした役割，都市部におけるゲットーやスラム街の形成と郊外化に自動車の普及や人種差別が及ぼした影響，など現代の都市・交通問題の歴史的源を探る。第10章は19世紀を自由放任の時代と捉えるのは皮相であり，開発政策や政府規制を通じて，「経済における政府の存在」は建国以来の伝統であり，第一次大戦を機にアメリカで「大きな政府」が受け入れられる下地を形成していたとする。ニューディールにしてもこの時の成功経験を受け継ぐものであり，また，その福祉立法は州政府による先例を引き継いだという認識が示される。ニューディールの諸改革は相対化され，福祉国家の成立も説かれない。むしろ，官僚組織の拡大をその遺産として挙げる。とはいえ，「貧富の格差」と題する節では，二世紀余にわたる所得（＝富）分配の変化におよぼした，市場と政府の二つの力を秤量し，今日の格差拡大に対しては政府の平等化政策の必要を示唆している。

最終章は，「植民地から帝国主義」にのぼりつめた「アメリカ帝国主義」の特質をイギリスとの比較で「文化帝国主義」に求め，多国籍企業の発展，ブレトンウッズ体制下のドルの基軸通貨化，60年代の貿易自由化の推進，と，20世紀に入り孤立主義から脱却して世界経済との結びつきを深めていったアメリカ経済を描いている。しかし，今日，国際社会がアメリカに求める役割は，「国際的公共財」の一手供給者という戦後のそれではなく，その多様な国民的経験を生かし，地球上の「貧困や環境の問題の解決」などに貢献することである，と本書を結んでいる。最後に索引に関して一言すれば，ジェシー・ジェイムズやカポネやコステロが載り，ケネディーやニクソンが載らないのは著者の姿勢の問題として分からないでもないが，自発的団体や（女性の）就業率やアメリカ的生活様式といったキーワーズを載せない理由は

何か，ついに「暗号解読法」を発見できなかった。

以上，かけ足で内容を紹介してきた。フロンティアの自然と孤立した人間の支え合う姿を描いて著者の右に出る歴史家はいないであろう。新・旧経済史の成果を巧みに取り入れ，平易な文体で統合した本書の魅力を評者の力不足で十分に伝えられないのが残念である。また，本書が南北戦争とニューディールの画期性を従来より格段に割り引いたことについては，その功罪をトピック別章立てという方法とからめて批評すべきかもしれない。しかし，この点は別の機会に譲り，ここでは次のことを強調して筆を擱くことにしたい。

建国後に限っても二世紀余の経済発展の歩みを過不足なく叙述し，しかも，最後まで読者を飽きさせないためには，該博な知識を単に散りばめるだけでは不十分であろう。それらを統合する努力，つまり，一本筋の通った歴史像として提示するなんらかの枠組が不可欠であるにちがいない。このような努力を指して「思想」と呼んだのは故村上泰亮氏であるが，この意味での「思想」の存在を，評者は本書の最大の特徴と考える。20世紀をアメリカの世紀たらしめた市場経済の発展とそれを支えた多様な人々の経験を描くだけではなく，21世紀の世界においてアメリカがはたすべき役割についても衒わずに指摘する著者の姿勢に評者は共感を覚える。数年前におこなわれた学術調査でも指摘されたように，*「アメリカ経済の現段階は，過去二百年におよぶそのダイナミックな発展の経緯を理解することなしには，十分把握できない」。それゆえ，南北戦争や第一次大戦までの時期を扱うアメリカ経済史と，第二次大戦以降の時期を扱うアメリカ経済論とが互いに背中を向け合う状態を克服することは，わが国におけるアメリカ研究の急務といえる。本書の公刊はこうした現状を打破する試みとして高く評価されなければならない。アメリカ経済史のスタンダードとして，本書は，対照的な接近方法をとる秋元英一氏の『アメリカ経済の歴史』とともに，多くの読者に迎え入れられるにちがいない。

高　橋　和　男
（立教大学経済学部教授）

＊『高等教育におけるアメリカ研究カリキュラム』（国際文化会館，1997年）